

近代英語協会第 28 回大会

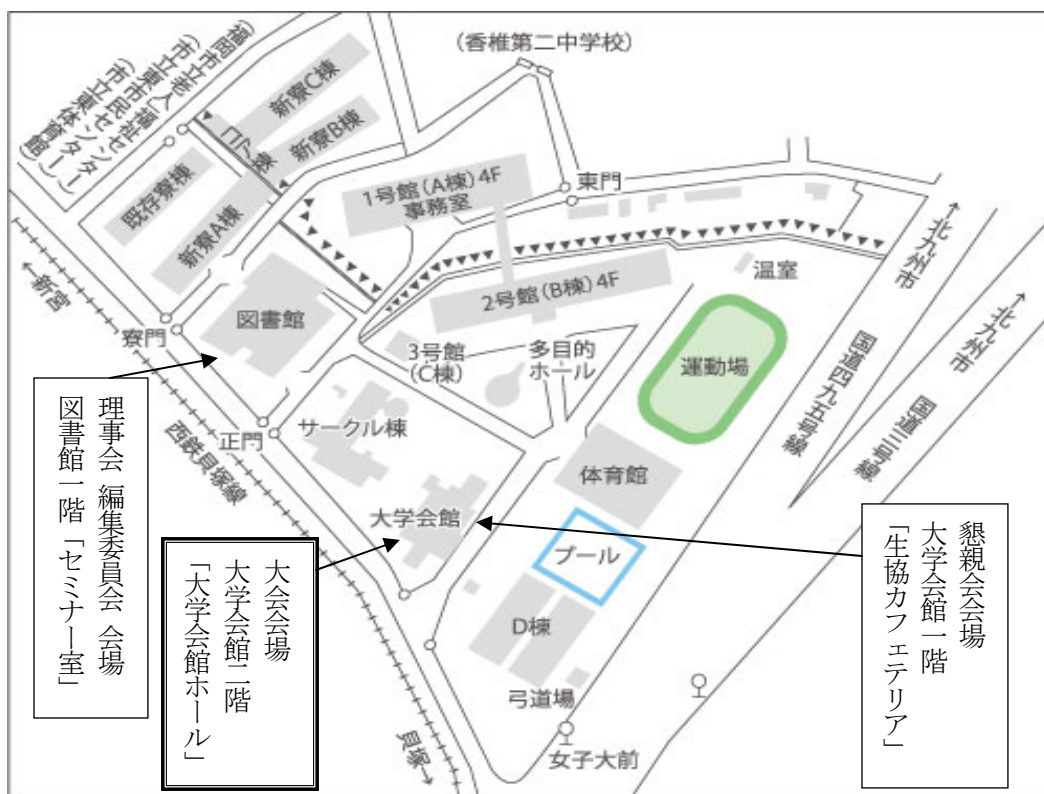
— シンポジウム・研究発表 —

日時：2011年5月20日（金）

会場：福岡女子大学 大学会館ホール

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1

TEL: 092-661-2411 (代)



<A>

交通手段は、最終ページに記載してあります。

近代英語協会事務局

〒732-0063 広島市東区牛田東 4 - 13 - 1

広島女学院大学大学院言語文化研究科 英米言語文化専攻米倉研究室

協会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mea/index.html>

(電話: 082-228-0386 (大代表) 振替口座 00810-9-5821)

「文学作品に見られる否定表現の通時的考察
—社会的・心理的視点からのアプローチ—」

司会：脇本恭子（岡山大学准教授）

講師：松浦芙佐子（岡山商科大学准教授）

講師：脇本恭子（岡山大学准教授）

講師：福永信哲（岡山大学教授）

シンポジウム趣意書

岡山大学准教授 脇本恭子

多用される否定語の種類と傾向や、文中での働きは、時代によって、さらには作家によって異なる。虚構の世界にある作中人物の関係や心理状態を伝えるのは作家が選ぶ言葉によるが、本シンポジウムでは、否定表現を使用することでどのような文体的効果が生まれるのか、社会的・心理的視点から浮き彫りにしていく。エリザベス朝では Shakespeare の劇を分析し、小説黎明期では Samuel Richardson、円熟期では George Eliot の小説を分析する。これにより、近代英語初期から後期にかけての否定表現の諸相を通時的に考察したい。なお、本シンポジウムで論じる否定表現は、否定的な意味合いを持つ語句を含め広義に扱う。

「*Othello*における否定構造—その心理的意味を考察する—」

岡山商科大学准教授 松浦芙佐子

Othello における否定表現の分布には顕著な偏りが見られる。本発表では、この偏りを足がかりに、否定表現の存在もしくは不在が表現する心理的意味とは何かを論じていく。*Othello* では、劇中人物は、それぞれが信じる「現実」は誤りであるという新たな「現実」を突きつけられ、自らの現実認識の再構築に格闘する。この現実認識の崩壊と再構築の過程において、劇中人物の心理的動揺を確信に変容させる技巧の一つが否定表現である。否定表現の頻度や形態など言語事象の分析をもとに、否定表現が登場人物の現実理解・現実認識にどのように影響しているのか、否定表現に潜む心理的意味を明らかにしたい。

「Samuel Richardson の小説における否定表現」

岡山大学准教授 脇本 恭子

心理小説の礎を築いたとされる Samuel Richardson であるが、その作品は、“disagreeable,” “implacable,” “in-/ungrateful,” “unworthy,” “hopeless,” “non-compliance” のような否定接辞の添加に一つの特徴が窺える。この否定接辞を含む語の中には、*OED* の初例となっているような独特な意味・用法もあれば、複数の同義語が畳みかけるように繰り返されたり、その逆に相反する内容の語が一括りになるなど、その使い方は多種多様である。さらに、他の否定語と連なって二重否定で用いられ、緩叙法のような修辞技法につながる働きの例も多々見られる。本発表では、登場人物のスピーチや思考に現れる心の動きを否定表現から分析することで、Richardson の文体的技巧の一端を明らかにしたい。

「George Eliot の *Middlemarch* に見る否定表現—性格描写における否定語の役割—」

岡山大学教授 福永 信哲

George Eliot 後期の小説では、社会的相互依存の中に生きる個人を描く文体の技は円熟の域に達している。人物の自我の動きを凝視する作家のまなざしには宗教と科学のぎりぎりの対話が窺える。自我の利己的本性を射貫く宗教の眼と、肉なる人間の生理と心理を読む科学の眼が相照らしている。人間の心身の機微を捉えようとする作家の文体は、おのずから否定語の積み重ねによって紡ぎ出されている。仮定法と否定語の織りなす心理描写は、この道の先駆者たる Jane Austen の遺産を継承していることを窺わせる。本発表では、*Middlemarch* のテキストを分析することによって、これを裏づけてみたい。

司会 日本大学教授 保坂道雄

1. 「遡及的動名詞の統語構造と歴史的発達について」

名古屋大学大学院博士後期課程 杉浦克哉

worth や need, want を始めとする評価及び要求の述語は、補部に動名詞を取ることができ、動名詞の目的語が母型主語に遡って解釈されるという点で遡及的である。本発表のテーマは、これらの述語がなぜ遡及的な解釈を許すのか、という問いに答えを与えることである。具体的には、need などの要求動詞の動名詞補部は名詞的動名詞であり、そのため移動は関与せず補部に空範疇は存在しないと考える。そして、名詞的動名詞の暗黙の項に付与される主題役割と母型主語との関連付けにより、遡及的な解釈が生じると提案する。一方、worth の動名詞補部は動詞的動名詞でその範疇は TP であると仮定し、空演算子の TP 付加位置への A バー移動により遡及的な解釈が可能になると主張する。さらに、worth の動名詞補部が中英語期以降、名詞的動名詞から動詞的動名詞へと変化したことを、歴史コーパスを用いた調査から立証し、その変化に伴い遡及的な解釈を生じる仕組みも変化したと主張する。

2. 「fast の多義性と意味領域の変化—中英語期と近代英語期を中心に—」

立教大学大学院博士課程後期課程 小笠原清香

現代英語における副詞 fast は同じ本動詞をとりながら“go fast”と“stand fast”では全く矛盾する意味合いとなる。しかしこの相互に関連性がないように思われる二つの語義は、通時的な考察を踏まえると、中英語期特有の強意の副詞としての用法が生んだものであり、一貫した語義変化をたどった結果によることが理解できる。

本発表では、中英語期と近代英語期におけるシェイクスピアの意味用法について実際の使用状況を比較・分析して、中英語期に大きく拡張する意味領域がその後 17 世紀を境に収縮していく過程を検討する。強意の副詞としての用法は OED によれば 17 世紀半ばに廃用となったことが分かる。なぜ中英語期に最も頻度が高く用いられた強意の副詞としての用法がこの時期を境に消失し、本来の原義ではなく中英語期に新たに現れた語義が現代英語に至るにつれてより一般的となっていくのか。こうした問題を中心に、fast の意味変化について通時的な観点から、その全体像における中英語期と近代英語期の語義変化の特質について主に動詞との共起性を中心に考察する。

3. 「副詞節内における完了形の用法について」

元福岡女子大学非常勤講師 柴倉水幸

Declerck は“Tense and Modality in English *before*-clauses” (1979) において、主節が過去形の時に *before* 節内に過去完了形が用いられる用法に着目し、過去完了形が“modality”を表すという立場から、時間の後先が逆転しているかのように見える用法について説明している。Declerck が挙げているのは現代英語の例文のみだが、時代をさかのぼり、中英語に書かれたロマンス“The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnelle”にも同様の用法が見られる。本発表では、*Sir Gawain: Eleven Romances and Tales* (1995) に収められている他の作品における過去完了形の用法とも比較しながら、*before* 節内の過去完了形が“modality”を表すのかどうか、その可能性について考察する。

司会 静岡大学教授 服部義弘

1. 「近代英語から現代英語にかけての否定接頭辞 un-の外来語付加について—Shakespeare の作品を中心に—」

大東文化大学大学院博士課程後期課程 岡田 晃

否定接頭辞 un-は古英語期以来、現代に至るまで、語基の起源に関わらず数多くの語彙を作り出してきた。また一方で、外来要素である in-が中英語期に入ってきたことにより、in-/un-cautious のように in-と un-の両接辞付加による二重語が誕生していった。しかし、このような二重語は基本的に意味を同じくしていたため、多くの場合、どちらか一方が廃語、もしくはほとんど使われなくなっていったと考えられる。そこで今回は Shakespeare に見られる in-と un-の二重語を列挙し、*The Oxford English Dictionary 2nd edition* で用例とその初出年代等を調べ、un-が外来語に対してどのように使われ、どちらの語がいつ頃から使われなくなっていったかを検証していく。また、現代における使用域と頻度については British National Corpus を使う。

2. 「動詞の弱変化化に関する一考察 —方言の影響—」

京都大学大学院博士後期課程 米田繭子

米田 (2010) は中世英語英文学会第 26 回大会で、中英語における動詞の弱変化化は類推によるのみならず、音の融合がもたらした時制の混乱を回避する目的を持っていたと結論付けている。しかし、この論説では古英語の頃に弱変化形が出現していた理由を説明できない。そこで注目したのが、方言による母音の違いである。古英語では母音 /æ/ が二種類存在する。一つは West-Saxon 方言の [ɛ:] で、もう一つは Anglian 方言の [e:] である。本発表では韻文・散文を問わず、様々な言語データを基に、動詞の弱変化化に関する一考察として、方言の影響について検証する。とりわけ、方言間における弱変化形の定着過程や、そこにみられる言語的特徴の検討を通じて、弱変化化の出発点に方言が関与していることを示す。

3. 「英語の V-ing 形と言語接触」

九州工業大学准教授 樋口万里子

V-ing 形は、現代ノルウェー語でも古英語でも純粹に名詞だが、ゲルマン諸言語の中で英語においてのみ、近代英語初期に動名詞として確立し、現在分詞としても V-ende に取って代わり、進行形の要素としても発達を遂げた。本発表では、これらの変化は相互に関連しており、そこには、古い時代から動詞性と名詞性を兼ね備え、前置詞 yn と組で現在分詞としても機能する、Welsh Verbal Noun (VN) が、深く関わっている可能性を示したい。OE 期で既に (前置詞+) V-ing は増加傾向にあり (Irwin: 1967)、それは近代まで続き (Houston: 1989, Fanego: 1996)、動名詞が in に連なる頻度も顕著である (De Smet: 2008)。Mittendorf and Poppe (2000) の指摘する Middle Welsh VN と口語中英語の V-yng も類似性が高い。言語接触の一般原則や、考古学及び DNA 研究の成果も支持要因である。

De Smet, Hendrik (2008) “Functional Motivations in the Development of Nominal and Verbal Gerunds in Middle and Early Modern English,” *English Language and Linguistics*, 12.1, 55-102.

Fanego, Teresa (1996) “The Gerund in Early Modern English: Evidence from the Helsinki Corpus,” *Folia Linguistica*, XVII/1-2, 97-152.

Houston, Ann (1989) “The English Gerund: Syntactic Change and Discourse Function,” in Ralph W. Fasold and Debora Schiffrin (eds.) *Language Change and Variation*, 173-196.

Irwin, Betty J. (1967) *The Development of the ING ending of the Verbal Noun and the Present Participle from c.700 - c. 1400*, Doctoral dissertation, University of Wisconsin.

Mittendorf, Ingo and Erich Poppe (2000) “Celtic Contacts of the English Progressive?,” in Hildegard L. C. Tristram (ed.) *The Celtic Englishes II*, 117-145, Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter.

司会 福岡大学教授 山田英二

1. 「初期近代英語期の声楽作品の発音の推定」

愛知県立芸術大学大学院博士後期課程 靄山陽子

初期近代英語期は、イギリスの音楽が世界で最も優れていた時代で、多くの声楽作品が残されている。歌詞テキストのみでは作曲者の想定していた発音を同定するのは困難だが、楽譜として伝えられている音楽構造や歌詞と音楽との関係を考察すると推定できる場合がある。

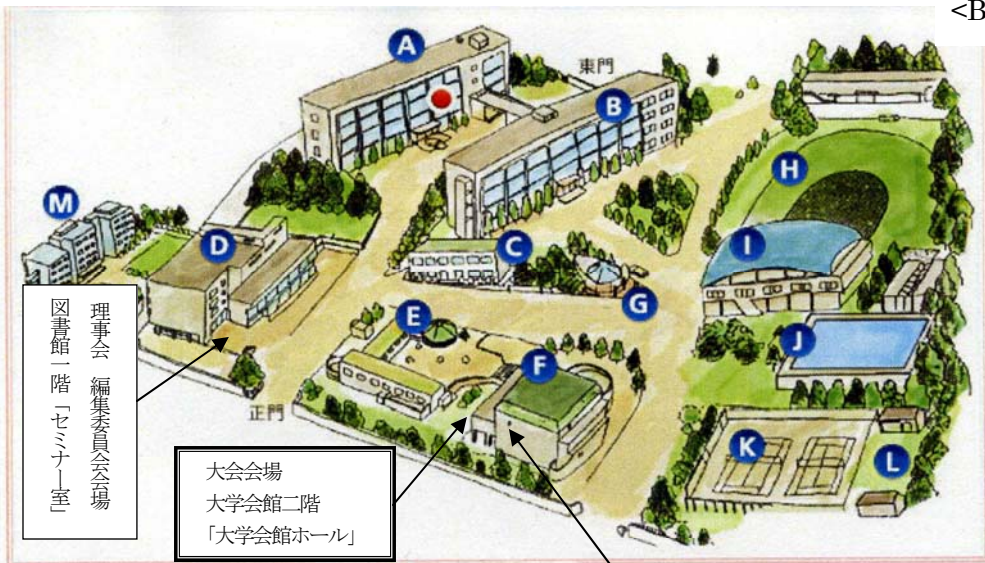
たとえば、大母音推移で単母音から二重母音へ変化する語は、対応する音型から、緊張が持続するか、緩んで次に進むかなどを考慮して、どちらの発音かを選択できる。また、単語に割り振られた音節数により、子音の母音化、母音の消失あるいは挿入などの変化の前後を判定できる。

さらに、この方法により、同時代の作品でも作曲者により発音が異なっていたことも示し、変化の途上で異なる発音が同時に存在していたことを裏付ける。

2. 「英語の母音の史的音量変化について—同器性子音連結の前での母音の長化を中心に」

聖徳大学教授 藤原保明

大母音推移の音質変化に関与した長母音には、-ld, -mb, -nd, -rd などの同器性子音連結の前で長化した強勢母音も含まれる。この長化が生じた音環境はかなり明確であり、時期もある程度限られているが、その原因とメカニズムに関する従来の説明は十分ではない。今回の発表では、この長化の原因とメカニズムの解明に挑む。分析と考察の結果として、グリムの法則の有声・帯気・閉鎖音>有声・無帯気・閉鎖音という音変化の結果、閉鎖音間に無声・有声の新たな対立関係が生じ、声 (voice) の有無による弁別機能が高まり、先行母音の音量の伸縮現象を生み出したこと、伸長した音量は当初は弁別的でなかったこと、この種の伸長は現代英語にも広く生じること、などの指摘を行う。



- ・ A 1号館(A棟)4F事務室
- ・ B 2号館(B棟)4F
- ・ C 1号館(C棟)
- ・ D 図書館
- ・ E サークル棟
- ・ F 大學會館
- ・ G 多目的ホール
- ・ H 運動場
- ・ I 體育館
- ・ J プール
- ・ K テニスコート
- ・ L 弓道場
- ・ M 學生寮
- ・ ● 情報処理演習室

懇親會會場
大學會館一階
「生協カフェテリア」

<C>



交通手段

- 西鉄電車(貝塚線)
 - 西鉄香椎駅から徒歩約12分(西鉄香椎駅の時刻表はこちらをご確認ください)
 - 香椎花園駅から徒歩約10分(香椎花園駅の時刻表はこちらをご確認ください)
- JR九州(鹿児島本線)
 - 香椎駅から徒歩約15分(香椎駅の時刻表はこちらをご確認ください)
- 西鉄バス 天神(郵便局前)
 - 都市高速経由の21A・26Aで約15分(女子大前)下車(西鉄バスの時刻表はこちらから検索してください)



会場地図<A>、、<C>と交通手段は、福岡女子大学公式ホームページの次のサイトを利用させていただきました。ご好意に厚く御礼を申し上げます。

<A> <http://www.fwu.ac.jp/guide/access.php>

 <http://www.fwu.ac.jp/campuslife/map.php>

<C> <http://www.fwu.ac.jp/guide/ambient.php>

<交通手段> <http://www.fwu.ac.jp/guide/access.php>

会員の皆様個々に応じた交通手段等は、公立大学法人福岡女子大学公式の公式ホームページの「地図、アクセス」(<http://www.fwu.ac.jp/guide/access.php>)でお調べください。